

## 概数表現くさぐさ

——辞苑閑話・六——

此処は御国を何百里

ことばとは不思議なものである。

ある表現について、それをおかしいとか誤用だとか思うことがある。だが、そう思うのは、その表現者の意図を正しく汲みとり、それなら別の表現をすべきだ、と考えるからである。つまり、明らかかな誤用であっても、よほどのことでないかぎり、たいていは意思の疏通ができてしまうということがある。その小さな誤用が重なって慣用になると、新しい表現として定着し、「A」と「非A」が同義語として共存することになる。時には、Aを駆逐して「非A」が正統の位置をしめる。こうしてことばは絶え間なく

変化する。

昨夏、フリーアナウンサーの辛坊治郎さんが、盲目の友人とヨットで太平洋横断の途について遭難した。救助要請をうけた海上自衛隊の救難飛行艇は、強風と荒波の中で救助に成功した。たまたま見ていたテレビの画面に、救助された二人の会見の様子が映った(2013.6.23)。辛坊さんのお詫びに続く感想「この国の国民であってよかった」にわたしは強く心をうたれた。だが、涙ながらに語った「たつた二人の命を何百人で救ってくれた」が気にかかった。

本節の題は、真下飛泉の詩【戦友】第一節、「離れて遠き満洲の 赤い夕陽に照らされて 友は野末の石の下」と

工藤力男

続く、その冒頭部分である。「何百里 離れて」は少しおかしな歌詞である。だが、「満洲」の語から、わたしたちは「何百里も」といった意味を補って理解しているのだと思う。

明治四十年の中等教育唱歌、犬童球溪の詩【故郷の廃家】には、「幾年ふるさと、来て見れば、咲く花鳴く鳥、そよぐ風、」とある。こちらは八五調であるが、「幾年」は、口語で平たくいえば、「何年かたって」とか「数年たって」とかなるのではないか。

小学唱歌の【仰げば尊し】の「教への庭にもはや幾年」の下に、わたしたちは「も過ぎにけり」などを補って理解しているようだ。定形の詩にはそうしたことが多いように思う。

このように、何ほどかの不十分な表現であっても、わたしたちは表現者の意図を補って解釈する。辛坊さんの発言と三つの歌で補われるべき助詞は、「も」や「か」だろうと思う。

本稿では、二行にわたる引用は斜線で改行にかえ、言及箇所傍線を施すこともある。

## 幾と何

「幾」と「何」はともに不定の意の接頭辞で、現代人の意識では、「何」は口語的、「幾」は文語的といえようか。「幾」が使われるのは、「幾つ」「幾ら」のほかは、少し改まった文脈の「幾ど」「幾にち」などで、砕けた文脈には「何」によるのが一般であろう。

前節にみた「いくとせ」に類する語は多くある。近年、最も頻繁に耳にするのは、外国為替の交換レート、株価の変動に関する報道の、「幾分値下がりした」などの「幾分」である。この文脈での「幾分」は、「わずかに」とほぼ同義とおぼしい。その語義を『日本国語大辞典』第二版（以下、『日国大』と略記）にみると、「①いくつかの部分に分けること。また、その分けられた部分。一部分。また、すこし。」「②いくらか。ある程度。すこし。」とある。挙例をみると、①と②は一括できると考えるので、ここにはわけずにひく。

この辞書の掲げる「いくぶん」の初出例は、伊藤特派全権大使復命書附属書類（1895）の「我兵の幾分を駐めざるを得ず」で、続く用例は国木田独歩『悪魔』（1903）の「反抗の念をすら幾分曖昧にしまった」としている。「幾

の訓と、「分」の音との《音一訓》構造、いわゆる湯桶読ゆづくよみみなので、由緒ある語ではあるまい。初出時期に近い、ヘボンの『和英語林集成』第三版(1886)、大槻文彦の『言海』(1889)にはみえない。少し下る山田美妙『日本大辞書』(1892)、落合直文『ことばの泉』(1898)にも掲出していない。よっぽど新しい用法で、辞書編纂者は載録をためらったのだろうか。

「何〜」についても同じことがいえる。その一つ、「なんべん(何遍)も湯桶読みの語である。『日国大』はやはり二分し、「①不明、あるいは不定な回数。」に、宮沢賢治『春と修羅』の「小岩井農場」(1923)から、「往ったりきたりなんべんしたかわからない」をあげ、「②多い回数。たびたび。しばしば。」には三つの用例をあげている。それは、『三体詩素隠抄』(1622)の「かかる時分に、張衡が四愁の詩を、うちかへうちかへ、なんべんも、吟じたぞ」、杉風あて松尾芭蕉書簡の「何篇もあらため」、尾崎紅葉の「一人むく助」の「何遍懲されても」である。だが、わたしにはこの記述は納得しがたい。一見して明らかかなように、②の三つの用例の「なんべん」は、いずれも下に「も」があるからである。

ちと仰々しいが、『国語学大辞典』(1975)の「疑問詞」(工藤浩執筆)の項の「用法」から要点と用例の一部をひく。

② 助詞カ・ヤラを伴って、不定を表わす。「だれかに会いたい」「だれやらに頼まれたそうだ」

③ 助詞モ・デモを伴って、全称(すべてのものごと)を表わす。いわゆる全面肯定・全面否定。「どこも満員だ」「どんな人にも親切だ」「だれも知らない」

『日国大』の②の記述は、「なんべんも」についてであって、「なんべん」についてではない。「も」の有無によって意味が大きく異なるのに、この辞典では一緒にしているのである。かかる扱いは他の項にもいくつか見られる。日本語を母語とする人間ならみんな知っているので実害はないだろうが、日本最大の国語辞書としてはいかがなものか。

かつて三上章が、『現代語法序説 シンタクスの試み』(刀江書院 1953)において、疑問詞に「か」のついた「何か」「誰か」「いつか」などを、「不定詞」と呼ぼうとかいていたことが思いだされる(p.349)。

### 宣長の苦言

本居宣長の『玉あられ』は、文語表現で誤り易い百十項

目について、歌と文にわけてかいた短章集である（1792刊）。その歌の部に「いく」の項がある。少し長いが、筑摩書房版の全集第五卷から三分してひく（原著にある二重傍線以外の記号は現代風にかえる）。

いくは、其数の知れざるを、疑ひて問意の詞なれば、上下の趣てにをはのはこびなども、其意を以てよむべきことなるに、近世人は、たゞ多きことと心得て、「いく千世」などいふを、千世の数多き事に定めてよむは、ひがごと也。「いく千世」といふは、千世の数の知れざるを、いくらばかりの千世ぞ、と問意なるをや。

「上下の趣」は、文脈ということであろう。「てにをはのはこび」は、どんな助詞がついているかということらしい。続く記述は、その「てにをは」の具体例である。

但し「いく千世も」などいへば、もにて数の多き意になるを、もといはでは、其意にはなりがたし。こは今の世にもいふ平語にてもよく分れたることぞかし。たとへば日の数をいはむに、「いくかも」といへば、日を重ねて多きことになるを、もといはず、たゞ「いくか」とのみにては、其数の知れぬを、疑ひてとふ詞に

あらずや。

「も」がつくと数の多さを意味することは、「今の世」の「平語」、すなわち宣長時代の日常語でも同様であったという。「いくかも」は全称、現代語の「何日も」にあたること、先に『国語学大辞典』の記述にみたとおりである。

結論は次の一文である。

これを以てすべていくといふ言のつかひざまを、ろえわくべし。

この条にのべたことによって、すべての疑問表現の用法をわきまえよ、と宣長はいうのである。

#### 和歌の実例

宣長は歌の実例を示していないので、どう考えるべきか、わたしは悩んだ。歌には掛詞や縁語など技巧をこらすし、音数律の制約による省略も多く、疑問詞の係りとそれの受けなどは曖昧模糊になりがちである。江戸時代中期の和歌は、わたしの読みなれない世界でもある。

そこで、テキストに新日本古典文学大系を選び、手始めに八代集を読んでみた。そして詞花和歌集で和泉式部の歌に出あった（表記には少し手を加える）。

幾かへりつらしと人を見熊野のうらめししながら恋しく  
るらん

「幾かへり」の下に「も」がほしいと直感したが、作者はこれだけで理解することを要求するのだろうか。校注者による大意では、初句に相当する部分を「繰り返し」としている。

「幾かへりも」の意で解したのである。他の注釈、『詞花和歌集全釈』（笠間書院 1983）には「何度も」、和歌文学大系本（明治書院 2006）の注には「何回も」とある。いずれも「も」を補って解釈していることになる。

続けて、同大系の『近世歌文集 上』に見いだした山名光豊の歌をひく。

いくとまりぬぬ夜もさすが旅なれてしばしまどろむ夢  
もはかなし

江戸の尼僧了然が諸家の歌を集めてあみ、戸田茂睡に託した『若むらさき』の中の一首である。校注者の解には「旅に出て幾夜か過ぎた。云々」とある。

幕臣石野廣通が江戸堂上派武家歌人の作を集めた『霞関集』からも磯田正隆の一首。

いく千里民のとまる所得て都しめたる国のひさしき  
校注者の解には「幾千と数えきれぬほどの里の云々」とあ

る。宣長の考えでは、「いく千里もの」となるはずである。「いく」以外の疑問詞の例として、『近世歌文集 下』から、宣長の論敵・上田秋成の「藤篋冊子一」（1805刊）の歌をひく。

春の野の鴟とすの草ぐき誰見ねどおどろき顔に鶯のなく  
校注者は第三句の大意を「誰の目にもとまらないが」としている。

ここまでの論述から、このたぐいなら古今集にもあることを思い出した人が多かったのではあるまいか。そう、巻第四・秋上の詠み人知らずの歌である。

昨日こそさなへとりしかいつの間に稲葉そよぎて秋風  
の吹く（172）

第三句以下、新日本古典文学大系本の大意は、「いったいいつの間に、稲葉がそよそよとそよいで、こんなに秋風が吹くのか。」とある。傍線でしられるように、末尾に「か」を補っている。

多くの注釈者は無頓着であるが、管見では唯一、全対訳日本古典新書の『古今和歌集』（創英社 1980）の片桐洋一さんの、「いつの間に」に関する注がある。

一四〇のように「らむ」と呼応する場合が多い。ここ

も「らむ」はなくても、あるような気持ちで訳した。

一四〇の歌は「いつの間に五月来ぬらむあしひきの山やま郭ほとけ公今ぞ鳴くなる」である。

以上、いずれも和歌の句末にあつて、字余りをさけるために助詞「か」「も」が略されたのであつた。宣長の苦言は至極もつともだが、和歌では音数律の制約のために、時おりかかる破格が生じたのだといえよう。

## 文人の実例

日常の話しことばで注意力が散漫なときは、小さな誤用は誰にもどこでも起こる。その実例は無数にあるといえるが、文筆をなりわいとした三人の散文の例を借りる。

それは私の四十何年の内面を、あますところなく語つてゐるものだったが、(幸田文「れんず」岩波書店版全集

一 p.402)

これは、冒頭の節にひいた、辛坊治郎さんの「何百人」と同じで、「か」を補うか、「数十年」に差しかえるべきだろう。

先に「幾分」に注目したとき、これが音訓交雑の語であることに言及した。この類は「いく日・いく人・いく晩」

「なに分・なん回・なん遍」など多くあるが、近代に成立したものが多し。よほど古いものでも院政期以後である。それらには、辞書の記述も「も」の有無に関心を払わないことが多い。次などもその一例であろうか。

ぬいはその菊枕を幾日ばかりで丁寧に作り上げた。

(松本清張「菊枕 ぬい女略歴」文藝春秋版全集35 p.141)

「数日ばかり」のつもりで用いたに違いないので、著者は、ここでのあげつらいには故障を言いたてるかもしれない。

かかる概数表現にあまり意を用いない作家もある。「幾」「何」を無造作に用いる作家の実例をあげる。

「でも、何十年ぶりに声聞くわけでしょ、少し懐しいんじゃないですか」(向田邦子「車中の皆様」文春文庫

『父の詫び状』p.121)

私は三十何年前の遠い記憶が間違っていなかった嬉しさより、そちらの方の重さと大きさに打たれていた。

(同「続・ツルチック」講談社文庫「眠る盆」p.59)

どことなくテレ臭くて、口に出さないままで三十幾年が過ぎたのである。(同「中野のライオン」同書p.214)

右の諸例は、著者も編集者も校閲者も大様な語の使用を良しとした結果だろうか。

せめて同一の文脈やペイジでは齟齬せぬようにしたい、わたしはいつもそう心して文章をかいている。他の人たちも同様だろうと思うのだが、たまに齟齬が露呈するのだからこわい。ごく近接して出現した実例二つがたまたま目についた。

大自然の知恵といえは、羽仁さんの本にシマウマやウシカモシカの大移動の話があった。何千、何万の大群が季節ごとに移動し、何万キロもの旅を続けるのはなぜだろう。(「天声人語」『朝日新聞』1980.7.31)

クラシック音楽も文楽も何百年の歴史を持つている。今、もてはやされているAKB48にいくら客が入っても、何百年もの間に、ベートーベンや近松を愛した客に比べれば、わずかなものである。(作家某氏『図書』岩波書店 2012.8 p.34)

### 接辞〈超〉のこと

かつて「言語時評・二」として「重言〈過半数を超え〉の論理」(『成城文藝』185 2003.3)をかいたとき、原稿をよんでくれた編集委員の南保輔さんから注意と教示をうけた。

タリバンに対する米国の軍事行動に関するギャラップ社の輿論調査結果の報道で、日本放送協会のテレビ画面に「半数超が支持」の文字があった。「半数」と「過半数」を同義に用いるこの協会は、新しい語が必要になって作ったのが「半数超」で、体重別階級制をとる運動競技の「○○キログラム超級」の表現をまねたのだろう、と推測した旨をかいたのであった。

南さんの教示によると、基準の数を $X$ とすると、日本語の「 $X$ 以上」は「 $X$ を含むが、英語の“more than  $X$ ”は「 $X$ 」を含まない。それを厳密に表現するために、基準の数を含まないことを「超」で表現するのだという。

なるほど、重量制をとる運動競技の選手たちは過酷な体重管理に努める。一グラムの差でも重大な結果に繋がることがあるだろうから、百キログラムと百一キログラムに差があつていい。デジタル式の計測機械ではその差が容易に判別できる。今、男子の国際柔道では、「軽重量級」を百キログラム以下、最も重い「重量級」を百キログラム超として

いる。  
わたしは前述のような経緯でこの「超」の意味をしつたのだが、この件にふれている国語辞書は多くない。『岩波

国語辞典』第七版・『大辞泉』第二版は、「超おもしろい」などを俗語として記述するにとどまる。すなわち接頭辞用法である。『広辞苑』第六版は、「接尾語的に」として用例「一万人超」をあげるだけである。少し詳しいのは『三省堂国語辞典』第七版(2014)であるが、これとても、その由来には言及しない。

わたしの見ることができたものでは、『明鏡国語辞典』(2002初版)だけがそれにふれている。すなわち、造語成分として、①に「超過・超音波・超満員」を掲げ、補足として「▽「五〇人超」は基準の数値を含まないでそれ以上、すなわち、五一以上の意。」としている。これすなわち接尾辞用法である。

わたしたちの日常生活で、一キログラムの物に二三グラムの増減があっても、「以上」か「超」か、「以下」か「未満」かと問題にすることはないように思う。上皿天秤で計るわけではない。それこそ概数表現、いずれも「約一キログラム」でいい。それに、わたしはこの「超」が嫌いである。元来、漢語の造語成分として「超特急」など接頭辞として機能した語なので、新たに接尾辞の用法も担わせるのは落ちつかないのである。

### 概数表現の実例

朝日新聞の【バリで飛行機／海に突っ込む】という一段記事の副題は「50人超けが」であった(2013.4.14)。本文には「地元メディアによると、50人以上が負傷したという。」とある。ここでは「以上」と「超」が同義で用いられている。河北新報配信の【大震災・揺れの犠牲90人超 宮城・山形・福島など1都8県】(YAHOO! JAPAN 2013.5.17)の本文には、「少なくとも90人以上を数える云々」とある。

右の二例について推測するに、見出しでは字数を一つ節約するために「超」を用い、本文ではその必要がないので、「以上」を用いたのだろう。これは新聞がよく用いる手段で、わたしはいろいろな表現について指摘してきた。この逆になったものはみえていない。

本文にある「超」の例を少しみる。朝日新聞の編集委員の署名入り記事「ザ・コラム」の本文に、中国残留邦人の帰国希望者「2千人超が帰国」したとある(2013.6.2)。【パスク武装組織／武器放棄を開始】という記事には「8000人超の命を奪った」とある(2014.2.22)。このたぐいは枚挙にいとまがない。連載記事「危機」後の世界経済の8【中国の憂鬱】(2014.3.16)には、「13日の米ダウ工業株平均

は230ド超下落。翌14日の日経平均株価も一時500円以上、下がった。」とあった。ここの使いわけが、わたしには理解できないばかりでなく、「超下落」を一語としてよんでしまった。

これらから見えてくるものが、柔道の階級を重量によって厳密にわけけるような「超」でないことは明らかである。もつたいぶりのようにみえる。文筆でくらす人は、「超」と「以上」の違いは勿論、「強」「余」「余り」の表現効果の違いにも留意すべきであろう。さらにいうと、「約」「ほど」「ばかり」「くらい」などを使いわける力も養うべきではなからうか。近年、これらをなんでも「くらい」で済ます傾向が強くなっているのは、日本語力の弱体化ではないか。「台風は今夜、紀伊半島くらいを通過するでしょう」という台風情報を耳にしたことさえある。

### おおよそならぬ概数

概数表現の**はずが**、概数すなわち「おおよその数」になっていないことがある。

共同通信配信の“47NEWS”（2014227）にみた記事の、題と本文の一部である。

【老朽橋6万超、5年以内補修必要 国交省推計、自治体道路10%】

インフラ老朽化対策の一環として国土交通省が2014年度から導入する統一基準で、自治体管理の道路橋約65万カ所を点検した場合約10%に当たる約6万5千カ所で5年以内に補修などの対策が必要（以下略）

本文に「約6万5千カ所」とあるにも関わらず、標題には「6万超」とある。皮肉なことに、六万五千は六万と七万のちょうど中間値である。それを「6万超」とかく感覚がわたしには理解できない。六万五千は四捨五入すると七万なのだから、「七万弱」でもいいことになりはしないか。これをかいた人たちには概数という観念がないのかもしれない。

報道の表現に限って実例を集めているわけではないが、音声表現は正確に書きとめることが難しいので、文字表現に偏るのである。

朝日新聞に【中国貴州省で／数千人が暴動】（2011.8.14）と題する報道があった。その本文には「数千人以上が集まり」としている。これは、見出しに用いるべき「以上」の二字を節約したのだろうか。だが、既に概数である「数千

人」に、さらに概数を意味する「以上」を加えて表現する意図がわたしにはわからない。【環境・エネルギー事業】に関する記事(2009.11.29)に「三井造船の運搬事業を報じて、「液化するには零下162度に冷やす製造施設が必要で、建設費は数千億円以上という。」があった。こんな雲をつかむような数値では、工事のアウトラインも描きようがないだろう。

概数を分母にする表現でも同じことがいえる。同紙の岐阜県のページに、【性同一性障害 数千人に1人】(2014.3.23)という記事があり、本文にも同一の表記がなされていた。そのような病気の実態はなかなか把握しがたいことだろうと思う。それならそれなりに、語の選択について、細心の配慮が必要ではなからうか。

### 五十音図——概数余論

かつて大学の教壇で国語学概論を講じているあいだ、現行の「五十音図」は「五十の音の図」ではないことを学生によく語ったものである。

まず、現代日本語では、ワ行の「を」はア行の「お」と同音であることが普通なので、音図としては「を」は余分

な文字である。そこで、ヤ行の「い・え」、ワ行の「い・う・え・を」を削ると四十四音、「ん」を加えても四十五音にしかならない。本気で音図をめざすなら、小字でかかれる特殊音「っ」も別置すべきである。これでも四十六音どまりである。

文字表をめざすなら、助詞専用の「を」も別置する必要がある。すると、四十七字になる。もつとも、促音「っ」は発音の準備をしたまま音を発しない時間を表わす、極めて特殊な文字であるが、ここではその議論をしない。さらに一般に外来語の表記に用いる長音符「ー」も必要だろう。かくて、ふつう目にする五十音図は中途半端なものなのである。

「五十音図」の名は契沖の『和字正濫鈔』(1695)に始まる。これとても、イ・ウ・エに重複があり、「ン」はなしい。契沖が意図したのは、五段十行、すなわち「5×10」の構造であり、五十は概数なのである。これを名称として表記するなら、「五十音図」以外には考えられない。これは、一の位の実数には責任をもたない表記である。だから、一の位に0をおいて、「50音」とか「50音」とか書くべきではない。いわんや「五〇音」においてをや。だ

が、今の日本人には漢数字の書けない人が多く、この手の表記が蔓延している。日本語を研究する我が同業者にもこうかく人がいる。

現行の『小学校学習指導要領』(1998)に「学年別漢字配当表」はあるが、五十音図も、学習すべき仮名字母への言及もない。仮名字の指導はどうなっているのか知るべく、孫が昨年使った一年生の国語教科書を送ってもらった。『ひろがることは しょうがくこくこ1上』(教育出版)の巻末に、折り込みの「ひらがなの ひょう」がある。ヤ行の「い」「え」、ワ行の「い」「う」「え」が括弧書きであり、十一行目に「ん」がある。その裏には「かたかなの ひょう」も同じようにのっている。

本稿でのべた数の表記について、高島俊男さんの論に<sup>[1]</sup>触発されて、わたしも発言したことがあるのでその標題を記す。高島さんの著書は、いま入手しやすいものをあげる。

(1) 「年は二八か二九からず」(「本が好き、悪口言うのはもっと好き」文春文庫)

「二年三〇〇六一〇五日?」(「お言葉ですが…①」同右)

(2) 「現代表記の論理と美学」(「成城国文学」15 1999)

「新聞醜悪録統紹——言語時評・十五」(「成城文藝」200 2007.9)

(平成廿六年五月廿一日小満)

#### 前稿「複合動詞の森」の訂正

40ページ下段三行めの「用例6」は「用例5」の誤りでした。高島俊男さんのご教示によって訂正します。